

『聖歌・讃歌集 こども編』(全2巻)の 編纂について

浄土真宗本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室では、このたび、子ども向け仏教讃歌の楽譜集『聖歌・讃歌集 こども編』全2巻の編纂を完了しました。本楽譜集は、2013年に刊行された『聖歌・讃歌集』(全6巻、内容については注を参照)の続編であり、本願寺派の幼稚園や保育園、日曜学校などで歌われてきた仏教讃歌を収めています。

1 生活を彩る仏教讃歌

「仏教讃歌」ときいて、みなさんはど

のような作品を思い浮かべるでしょうか。音楽法要や音楽礼拝、仏さまや親鸞聖人を讃える歌、あるいは行事の歌を挙げる方が多いのではないのでしょうか。

実は、子ども向けの仏教讃歌は、それだけではありません。「おはよう」のご挨拶から、お弁当の前に手を洗う歌、お昼寝の歌、そして「さようなら」の歌まで、一日のさまざまな機会に歌う作品がそろっています。

大切なのは、歌詞には必ず、仏さまを身近に感じさせるような言葉が織り込まれている点でしょう。子どもたちは歌う

ことを通じて、仏さまに親しんでいきます。子どもたちがみ教えにふれ、仏さまに手を合わせることが自然とからだに馴染んでいく、そのきっかけのひとつとして、子ども向けの仏教讃歌は創作され、歌い継がれてきました。

2 子ども向け仏教讃歌の歩み

仏教讃歌は、日本の近代化が進みつつあった明治時代の中頃に生まれました。100年あまりの歴史において、仏教界のなかでも特に私たちの宗門は、創作や普及に大きな役割を果たしてきました。

大正時代には、日曜学校運動で指導的立場にあった人びとが作詞や作曲を行っていたことが知られています。それらは当時、「讃仏歌」という名で親しまれました。現在でも広く歌われている《降誕会行進曲》《報恩講の歌》《みほとけにいだかれて》などは、この動きのなかでつくられた作品です。

また、昭和初期には、「仏教童謡」と

よばれた作品群が登場します。このときは、「本願寺派仏教保育研究会」から作品が多数発表されるなど、宗門としての取り組みもみられました。さらに同じ頃、「日本仏教童謡協会」が設立され、通仏教的な立場から活動していました。この協会には、本願寺派の人物も多く加わっていたことが確認されています。

そして戦後は、保育連盟や仏教音楽研究所（現・浄土真宗本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室）が、宗門関係学校と連携をとりながら、作品を世に送り出していきました。

3 『聖歌・讃歌集 こども編』の内容

既刊の『聖歌・讃歌集』は、仏教讃歌という文化を宗門の内外に周知することと、その歴史を常に牽引してきた宗門の集大成たる楽譜集としての公表を目的に編纂しました。『こども編』も同じく、子ども向け仏教讃歌の歴史と特徴に鑑みて資料の検討を重ね、155作品の伴奏付き

楽譜と歌詞を掲載しました。

第1巻には、音楽法要・音楽礼拝、仏さまや親鸞聖人を讃える歌、そして行事の歌など66作品、そして第2巻には、子どもの生活や、自然・動物などをテーマとする89作品を収録しています。

これらの仏教讃歌は、発表された時代や内容はさまざまですが、どの楽曲にも、



「降誕会園児のつどい」における音楽礼拝（2015年5月20日）

おみのりを子どもたちに伝えたい、という強い思いが込められています。『聖歌・讃歌集 こども編』が、そのご縁づくりの一助となることを願っています。

浄土真宗本願寺派総合研究所

仏教音楽・儀礼研究室

注

『聖歌・讃歌集』各巻の内容は以下の通りです。

第1巻…音楽法要・音楽礼拝・ご和讃に

メロディーを付した39作品

第2巻…仏さまや親鸞聖人を讃える57作品

第3巻…仏教行事・通過儀礼に関わる41作品

第4巻…教化団体の発表曲や日々の生活を歌った48作品

第5巻…仏教徒の喜びや、生命を主題とする48作品

第6巻…御同朋などを主題とするもの、BGM用の器楽曲など45作品

ご購入については、本願寺出版社（フリーダイヤル0120-0464-583）へお問い合わせください。

お問い合わせください。